

山陽特殊製鋼株式会社
2016年度決算および第10次中期経営計画 説明会
主な質疑応答（要旨）

開催日 2017年5月19日（金）
説明者 代表取締役社長 樋口 眞哉（第10次中期経営計画）
常務取締役 高橋 幸三（2016年度決算）

Q. 第10次中期経営計画に関して、数量の上方余力はどの程度か。

A. 現状は少し余力があり、整流化等を実施すると、さらに、もう少し能力が出てくるとみている。しかしながら、足元でも、需要が好調で数量的には高いレベルであることや、今後、競合が激化するとみられることから、数量が大幅に伸びることは想定していない。もし、上方ニーズが出たときには、納期を守りつつ、高品質な製品を生産できる体制にしたいと考えている。

Q. 中期経営計画において、セグメント別ではどう考えているのか。

A. 非鋼材事業の売上を1.5倍にすることを考えているが、利益面では、メキシコの立上げが当面続くため、今とあまり状況は変わらないとみている。

Q. 軸受鋼のマーケットについて、大きな流れを教えてください。顧客のニーズ、競争環境などを含めて教えてください。

A. 中国・韓国を中心とする海外ミルの競争力が増し、多くの現地材が使用されている。顧客は、現地材でカバーできないところ、すなわち高速鉄道、航空機、宇宙開発関係などの厳しい用途については、日本の鉄鋼メーカーから購入していると思われる。なかでも軸受鋼は当社が高いシェアをもっている分野であり、この格差を維持していきたいと考えている。

Q. 中期経営計画の生産構造改革について、コスト削減効果がどれくらい出るのか。また、いつ頃完了するのか。

A. コスト削減効果については、申し上げられないが、生産構造改革によって、全体コストをさげることで、また、60t系列（第一工場）のコストを150t系列（第二工場）に近いレベルにしていきたい。互換性のある工程を持つておくことで、BCPにもつながる。

完了時期については、ボトルネック解消や整流化は、今中期中に実施したいと考えているが、大規模な更新については、立ち上げや成果の刈取りが次の中期にずれ込む可能性がある。

Q. どのようなマーケットに数量の成長の余地があるのかについて、教えてください。

A. マーケットについては、国・地域というよりは、セグメントだと思っている。特に軸受鋼については、高速鉄道向けなどハイエンド品につき、日本に限らずグローバルに捕捉していきたい。

そのために、海外の軸受メーカーや自動車部品メーカーにも営業をかけていく。汎用品を伸ばすというよりは、厳しい用途向けの製品で、グローバルに数量を伸ばしていきたいと考えている。

Q. 2017年度業績予想に関し、2016年度対比で、原燃料価格のコストアップ160億円は多いように思う。その前提や山陽特殊製鋼固有の要因があれば教えて頂きたい。

A. 業績予想は、3月末の単価を前提にした。また、オイル価格は若干保守的にみている。当社に固有のコストアップ要因はない。なお、高浜発電所の再稼働は、予想業績に対するプラス要因になるとみている。

Q. 中期経営計画における経常利益の組み立て方について、2016年度対比で200億円の原燃料価格のコストアップを、販売価格・構成とコストダウンでカバーするという形になっている。コストダウン分が増益になるような計画になっていないが、スプレッドの考え方について前提を教えてください。

A. 原料価格は、かなり保守的にみている。マージン悪化は打ち返すべきだが、若干の増益にとどまる計画としたのは、それくらい厳しく見ておいた方が良いだろうという考えである。

競争激化はどうしても起こりうる。韓国・中国メーカーの力がかなり上がってきているため、汎用品の価格については競合の影響を受けざるを得ず、それらを計画には織り込んでいる。

Q. 中期経営計画における投資500億円について、固定費先行、投資先行ではないのか。また、M&Aについてどう考えているか。

A. やや先行投資的だと考えている。工場への投資は、すぐに効果が刈り取れるわけではない。基盤を整えた上で操業も変更し、その後効果がでてくるということになる。

更新や改善が遅れたために大きな事故につながるということもある。当社はこれまで大きなトラブルなくきているが、大きな事故が起こる前に、あるいはもっと上方弾力が必要になる前に、手を打っておきたいと考えている。

M&Aについて、在庫、熱処理など、小ぶりの投資で良いものを探していきたいと考えている。投資500億円については、D/Eレシオを0.2倍以下に抑えるという水準、償却費を過去のピークに抑えるという水準。この2点から500億という枠を設定した。

Q. 山陽は、国内外の特殊鋼メーカーと比較して、どこに競争力があるか。

A. 当社の軸受鋼は、非金属介在物のサイズが小さく、かつその数が少ない。軸受鋼は清浄度が高いことが重要であり、当社の高清浄度鋼製造技術は世界に誇れると考えている。また清浄度の高さは、自動車部品など他の用途へも拡大できる重要な技術的な特色であると考えている。

以上

本資料に記載された将来の予測等は、説明会の時点で入手可能な情報に基づいたもので、今後様々な要因によって異なる結果となる可能性があります。いかなる確約や保証を行うものではありません。